【生きがいをボランティア活動に求めて】

山口　ゆき子

地域社会は住民が主体となり支えるものであり、その活動は住民交流や相互扶助に対応した活動で、これらはどちらもなくてはならない切り離せない不可分の関係だと思います。本格的な高齢化社会を迎えて社会に役立つためには、人生ビジョンを明確にし意義づけることにより、充実した人生を送ることができると思います。

高齢者の生きがいを支援する専門家として、財団法人（健康、生きがい開発財団）の認定を受けた健康づくりアドバイザーの資格を得、そのときの仲間が全国から集まり０２２３会（ふじさんかい）と名付け年に二度程度親睦を深め現状報告や意見交換をしています。また、山梨県の有志約20人により協議会をつくり、充実した老後を支援したり、生涯現役を目指しライフプランの相談をしたりと活動しています。

身近な活動としては、都留市読み聞かせボランティアグループ（こぶたの会）に所属し、子ども達に絵本の読み聞かせを主にしています。会員は家庭の主婦や、いろんな職業のお母さんだったりとさまざまですが、普段の生活の中で培ったものを子ども達を通して自分づくりをしては地域社会に溶け込んでいます。図書館で絵本の読み聞かせをしたり、幼稚園や保育園、また、学校へと依頼があればでかけます。

また、個人のボランティア活動としては、都留市デイサービスセンターで利用者の皆さんと童謡に合わせて簡単な手遊びや、民謡を歌いながら踊りを一緒に楽しんでいます。

3年前、50の手習いと称して、日曜日2時間程かけて甲府のリトミック教室へ勉強に通いました。20歳位の若いお嬢さんと飛んだり跳ねたりと、ただ時間が過ぎるのを願うばかりの辛さでしたが、過ぎてみると懐かしい思い出です。ボランティアと称して自分づくりする時に、その時の経験が箇所箇所に生きていることに気がつき、目標を持つことは年齢に関係なく、勉強は全てが無駄にならないことを実感しました。ただ、私がまだ現役で仕事を持っていますので、時間調整が一番の難題です。人と人とのつながりは、永久的な財産ですので、これからも親睦を図り、情報収集しながら生きがいづくりをしていきたいと思います。

生涯学習通信　生涯学習推進会議

のびのび　いきいき　生涯学習

『わたしの生涯学習』

【ひとり句を詠む】

大石　清

「虚無の胸開ければ蟷螂生れけり」

俳句を始めたのは、昭和31年からですが、市役所職員で「あかとんぼ」を結成、毎月句会を開いて作句活動をしていました。

私は15歳のとき両親を失い、18歳には市の職員になっていました。公僕という立場と障害者という社会に対する非活動性による心身のストレスが高じている時期で、その悩みは重症でした。

昭和31年7月に県立中央病院で両手の整形手術を受けたのですが経過が良くないため、昭和36年7月湯河原整形外科病院に再入院し数回の手術を受けました。冒頭の句は、病床吟ということになりますが、俳句を始めていてよかったと痛感しています。以後60歳の定年まで市職員として勤務させて戴き、感謝の念を禁じ得ません。

掲出「虚無の胸」の意図するところは、私どもの周りには常に楽しいことばかりでなく、ある時は怒り、あるいは悲しみ、むなしい気持ちにおそわれることがあります。それ故に人間としての生きていく意味があると思います。多かれ少なかれ、思想的な心のいらだちもあるでしょうが、そんなときの心の置き場所は敢えて人間社会ではなく大自然の深い所を拠り所として求める、そこにあの「カマキリ」のぎらぎらした、しかし、実在のカマキリではなく幻のカマキリを生まれて自分自身の不安と対決していこうとした態度を詠んだように記憶しています。

以下にその後の駄作を掲げます。俳句を詠む楽しみのようなものを感じている昨今です。

・愚かさへ芽ぐむ序列のかわりなし
・風鈴や灯を消してより艶を得し
・新涼の屋根が孤独の広さもつ
・生き得たり寒菊母のように見る

話は別ですが、昭和56年12月発行された、小林貞夫著「芭蕉の谷村流寓と高山麋塒（びじ）」について、当時市立図書館職員として勤務の他、著者に芭蕉関係の文献資料の収集に協力できたことを、俳句を詠むたびに思い出します。

・蕉翁の駒のたり往く稲架日和